

Sultan Omar Ali Saifuddin Mosque
スルタン・オマール・アリ・サイフディン・モスク (ブルネイ)



JSPS BANGKOK
CONTENTS

JSPS主催事業説明会の開催	01	センター活動記録	30
バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント	06	コラム	31
JSPS同窓会情報	13	学術情報 (2019年10月－12月)	36
特集「Diversification of Student Mobility and the Role of UMAP (多様化する教育交流とUMAPの役割)」	22		
UMAP国際事務局事務次長・東洋大学国際学部教授 芦沢 真五			



センター長挨拶

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

バンコク研究連絡センターの活動報告書「バンコクの風」の 2019 年度第 3 号（2019 年 10－12 月分）をお届けします。

昨年の後半、大学入試での英語民間試験や国語・数学の記述式問題の導入についての賛否の議論が沸き起こり、結果として延期が決まりました。今後のあり方を話し合う有識者会議の最初の会合が、1 月中旬に開かれるとのことです。

そもそもこの問題の本質は、将来を担う若者がグローバル社会で生きていくための教育改革であり、その柱である高大連携構想の一環としての大学入試制度の見直しだったはずです。しかしながら、高校のカリキュラムやそれに必要な教員の配置などはあまり考慮されず、さらには民間試験導入や記述式試験の実施に対して疑問や慎重論があったに関わらず政治主導で突っ走ってしまったことが現在の状況に帰結しました。

新しい有識者会議には、誰もが納得できる案を提示してもらいたいものです。

2019 年は、バンコクセンターが設置されて 30 周年となりました。それを記念し、また 2030 年を達成年とする国連が提唱する SDG s（持続可能な開発目標）をテーマにした国際シンポジウムを 2 月 18、19 日に、タイ学術会議（NRCT）と JSPS タイ同窓会（JAAT）との共催で開催します。このシンポジウムを通して、バンコクセンターの今後の在り方も模索していきたいと思います。

2020 年 1 月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長

山下 邦 明

JSPS 主催事業説明会の開催

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターが訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

インドネシア・バンドン工科大学で JSPS 事業説明会を実施（10 月 30 日）

2019 年 10 月 30 日バンドン工科大学（Bandung Institute of Technology）で JSPS 事業説明会を実施しました。バンドン工科大学での事業説明会は今回が初めてで、ご自身も JSPS の事業経験者である Dr. Edwan Kardena, Director of Partnership and International Relations のご協力により実現することができました。

最初に Prof. Bambang Riyanto Trilaksono, Vice Rector for Research, Innovation and Partnership よりご挨拶を頂きました。Prof. Bambang も JSPS の支援により早稲田大学で短期間研究をされた経験があるご紹介いただき、ITB に所属する研究者には積極的に日本も含め国外の研究者と共同研究を実施して欲しいとの言葉がありました。

続く事業説明会では当センターの山下センター長から JSPS 及びバンコク研究連絡センターの概要について説明し、富山副センター長及び臼井国際協力員から国際事業について紹介しました。

その後、Dr. Edwan より、ご自身の日本での研究経験及び JSPS の二国間共同研究事業について講演いただきました。Dr. Edwan は JSPS の支援により北海道大学で短期ポストドクとして研究された経験をお持ちです。また、Edwan 先生は JSPS とインドネシア研究技術高等教育省科学技術高等教育資源総局（DG-RSTHE）の二国間共同研究事業のインドネシア側の審査委員も務められていることから、同事業についてもご紹介いただき、若い研究者にも積極的に JSPS 事業に応募いただきたいとの激励の言葉で講演を締めくくられました。

最後の質疑応答では二国間事業や拠点形成事業を中心に多くの質問が寄せられ、事業説明会は盛況のうちに終了しました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2019/10/30/8333/>）

JSPS 主催事業説明会の開催

キングモンクットラカバン工科大学で JSPS 事業説明会を実施（11 月 27 日）

2019 年 11 月 27 日（水）、キングモンクットラカバン工科大学で JSPS 事業説明会を実施しました。工学系に強みを持つ同大学のキャンパスは、緑があふれクリーンな印象でした。

最初に、Asst. Prof. Dr. Chaiyan Jettanasen, Vice President for International Affairs (Acting) から歓迎の挨拶があり、昨年度に引き続き、JSPS バンコク研究連絡センターが事業説明に訪問してくれたことに感謝の言葉がありました。また参加者に対しては、プレゼンテーションをよく聞いて、意見交換や質問を積極的に行ってほしいと呼びかけました。

続いて、山下センター長・富山副センター長から当会の概要・同窓会組織等の説明をいたしました。また、臼井・濱端両国際協力員から各種国際事業の説明を行いました。

そして、日本学術振興会の論文博士号取得希望者に対する支援事業 経験者の Assoc. Prof. Dr. Adisorn Swetwathana に、ご自身の経験をご講演いただきました。

まず、JSPS の各支援事業は、研究者の好奇心を尊重する「ボトムアップ型」であることから、たいへん助かっているとコメントがありました。

ご自身のプレゼンテーションでは、日本での研究の様子を、当時の写真を交えてご説明くださいました。一部には、食用肉とバクテリアに関するご研究もあり、市民の実生活に関連する研究にも取り組まれていることが伝わってきました。

最後に、JSPS 同窓会の意義も強調くださいました。研究者同士のネットワークを強化し、最新の情報を手に入れるためにも、ぜひ加盟いただきたいと、参加者に呼び掛けられました。

今回の説明会の参加者は、メモを熱心に取りながら情報収集に努めておられ、当会事業への申請を検討しているという声も多く聞かれました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/11/27/8401/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

ヤンゴン大学で JSPS 事業説明会を実施（12 月 10 日 午前）

2019 年 12 月 11 日（水）、ミャンマーのヤンゴン大学で、ヤンゴン大学設立 100 周年事業として JSPS 事業説明会を実施しました。今回は前回 2018 年 1 月に引き続いての実施で、多くの研究者の方に参加いただきました。

はじめに Dr. Pho Kaung 学長より開会の挨拶がありました。挨拶の中では、参加者に対して、JSPS の国際事業を利用し、ぜひ自らの研究者人生を飛躍させてほしいとメッセージを送っていらっしゃいました。

その後、山下センター長より JSPS の沿革や同窓会組織について紹介しました。その上で、JSPS は、若い研究者のサポートに力を入れていること、およびミャンマーでも将来的に同窓会を立ち上げてほしい旨をお伝えしました。

臼井国際協力員と濱端国際協力員からは、JSPS の国際事業に関するプレゼンテーションを行いました。

出席者の多くはメモを熱心にとっており、JSPS の国際事業に対する期待や関心の高さを感じることが出来ました。



Dr. Pho Kaung（左）、山下センター長（右）

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/12/11/8456/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

ヤンゴン工科大学で JSPS 事業説明会を実施（12 月 10 日 午後）

2019 年 12 月 11 日（水）、ミャンマーのヤンゴン工科大学で JSPS 事業説明会を実施しました。今回は前回 2018 年 1 月の実施以来 4 度目の事業説明会となります。今回は参加者を博士課程学生と教員に限っていたにもかかわらず 70 人以上の参加者がありました。

始めに Dr. Myint Thein 学長より開会の挨拶がありました。挨拶の中では昨年に続き JSPS の事業説明会を開催できることは喜ばしく、特に若い研究者にとって日本で研究を実施する良い機会となって欲しいとの言及がありました。

その後、フォトセッションを挟んで山下センター長より日本の科学技術政策や JSPS の組織、バンコクセンターの活動概要について紹介した後、臼井国際協力員と濱端国際協力員より JSPS の国際事業を説明しました。

質疑応答では外国人研究者招へい事業と論文博士号取得希望者に対する支援事業を中心に多くの質問が寄せられました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/12/11/8441/>)

JSPS 主催事業説明会の開催

タイ国立科学技術開発庁で JSPS 事業説明会を実施（12 月 17 日）

2019 年 12 月 17 日（火）、タイ国立科学技術開発庁（NASTDA）で、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）と JSPS の合同事業説明会を実施しました。

最初に、Dr. Lily Eurwilaichitr, Vice Presiden から歓迎の挨拶があり、科学やイノベーションの発展には、国内だけではなく、海外の研究者との活発な議論や国際協力が必要不可欠であると言及がありました。

続いて、山下センター長から当会の概要・同窓会組織等の説明をいたしました。説明の中では、バンコク研究連絡センターは、タイ国内の大学での事業説明会を大変重視しており、これからも関係強化に努めたいことをお伝えしました。



Dr. Lily Eurwilaichitr



山下センター長

臼井・濱端両国際協力員からの JSPS 国際事業説明に続き、日本学術振興会の論文博士号取得希望者に対する支援事業（論博事業）経験者の Dr. Seksan Papong に、ご自身の経験をご講演いただきました。

論博事業に対する支援事業の概要や応募方法について、ご自身で作成した図表を使いながら、丁寧にご説明されました。

同氏は、東京都市大学で、環境問題に関する研究を行ったそうです。プレゼンテーションのなかでは、論博事業のサポートの中で、世界中の研究者とのネットワークを築くことができ、また日本で所属していた研究室との繋がりが、いまでも発展的に続いていると仰っていました。

最後に、JST シンガポール事務所の小林義英チーフが、JST の沿革や、SATREPS など、JST の国際事業をご説明されました。情報量の多いプレゼンテーションで、参加者も熱心に聴き込んでいました。



Dr. Seksan Papong



小林チーフ

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/12/17/8468/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

バンコク研究連絡センターでは、対応機関であるタイ学術会議（NRCT）と学術セミナーを共催しているほか、バンコクで実施される国際的な学術シンポジウムやイベントに積極的に参加し、ASEAN地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

在ネパール日本国大使を表敬訪問（10月15日）

10月15日（火）、前日14日（月）に開催された第5回ネパール同窓会シンポジウム（シンポジウムの様子は14～16ページに掲載しています。）の開会式にご臨席いただいた西郷駐ネパール日本国特命全権大使へのお礼のご挨拶を兼ね、在ネパール日本国大使館を表敬訪問しました。シンポジウムでご講演いただいた加藤先生、およびJSPSネパール同窓会のRi.jan会長も一緒しました。

西郷大使からは、ネパールでの教育・学術の状況について興味深い話をお聞かせいただきました。

また、ネパールはこれから発展していく国なので、日本の大学関係者の皆様からのご協力に期待しています、とメッセージを頂きました。さらに、JSPSネパール同窓会の研究者は、いまやネパール中で活躍しているので、日本とネパールを繋ぐ架け橋にぜひなってほしいとエールを送っていました。

山下センター長からは、東南アジアのJSPS同窓会のなかでも、ネパール同窓会の研究者はトップクラスに日本に協力的だとお話をいたしました。これには西郷大使もご納得の様子で、ネパール人と日本人は、考え方で共通項があるため、親近感を持ちやすいのではないかと応じていました。

最後は、大使館の玄関で記念写真を取らせていただきました。

当センターでは大使館との協力関係を密にして、今後も、国際学術交流を積極的に推進していきたいと考えています。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2019/10/15/8292/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

東海大学 海外研修職員一行の来訪（11月5日）

2019年11月5日、東海大学出版部出版課の原裕職員、同大学の産官学連携センターの清水菜緒子係長、および東海大学アセアンオフィスの田中久美子地域統括が当センターを訪問されました。原職員および清水係長は、海外研修の一環として来タイされています。

当センターからは、JSPSの概要からはじまり、バンコク研究連絡センターの活動や国際学術交流研修に関する説明をさせていただきました。

お2人からは、東海大学で実施中の、科研費の採択率を上げる取り組みについて情報提供をいただきました。また東海大学では、科研費の応募数を上昇させる試みも同時に実施しており、そのお話も興味深く聞かせていただきました。

当センターでは、タイに拠点を持つ日本の大学に対して、情報提供などで引き続きサポート等を行って参ります。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/11/05/8312/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

RIHED 60th Year Anniversary & AIMS 10th Year Anniversary Ceremony に出席 (11 月 11 日)

2019 年 11 月 11 日 (月) Hotel Nikko Bangkok で開催された “RIHED 60th Year Anniversary & AIMS 10th Year Anniversary Ceremony” に当センターから山下センター長、富山副センター長、臼井国際協力員が出席しました。

SEAMEO-RIHED は東南アジア地域の高等教育分野の研究・開発事業を担う組織で、その前身である RIHED (The Southeast Asian Ministers of Education Organisation) は 1959 年に設立されました。

1993 年に SEAMEO (Southeast Asian Ministers of Education Organisation) の下部組織となり現在に至ります。

AIMS (ASEAN international mobility for student program) 等を実施しています。

設立 60 周年と AIMS 事業の 10 周年を記念し、2019 年 11 月 11 日 (月) から 11 月 15 日 (金) にかけて「SEAMEO RIHED's Southeast Asian Higher Education (SEA-HIED) Week」として、AIMS プログラム参加学生のスピーチコンテストや、事業のレビューミーティングなど様々なイベントが開催されます。

その最初のイベントとなる今回のセレモニーでは、Dr. Chantavit Sujatanond, Centre Director, SEAMEO RIHED と Prof. Dr. Wichit Srisa-an, Former Minister of Education, Thailand が挨拶を述べられました。また、AIMS の 10 周年を記念して開催されたロゴマークの学生コンテストの結果が発表され、インドネシア Sriwijaya University の Ms. Benedikta Melania Rahmawati がデザインした新たなロゴマークがお披露目されました。

続いて AIMS 参加国の代表により新しい AIMS の覚書の署名式が行われました。この覚書により、新たにシンガポールが AIMS 加盟国に加わりました。

最後に、第 1 回 AIMS プログラム (当時は M-I-T プログラム) に参加した Mr. Chanokphol Chaisuparakul のスピーチがありました。

このプログラムに参加したことは自身の大きな成長につながる貴重な経験であり、今の自分があるのは AIMS のおかげであるとの言葉が印象的でした。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/11/11/8348/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

UMAP International Conference 2019 に出席 (11 月 13 日)

2019 年 11 月 13 日 (水) 午後 Hotel Nikko Bangkok で開催された UMAP International Conference 2019 に当センターから富山副センター長、臼井国際協力員、濱端国際協力員が出席しました。

UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific: アジア太平洋大学交流機構) はアジア太平洋地域における高等教育機関間の学生・教職員の交流促進を目的に、政府または非政府の代表で構成されるコンソーシアムです。2016 年から 2020 年の国際事務局を東洋大学が務めています。

今回のイベントは加盟機関同士のネットワーキング作りや情報共有等を目的に、SEA-HiEd week の一環として開催され、“International Student Mobility for the 4th Industrial Revolution (4IR)” をテーマに、以下の通り講演とパネルディスカッションが行われました。

Introductory Remarks: Why UMAP?

UMAP 国際事務次長 (東洋大学) 芦沢真五教授

Opening Remarks

Dr. Sumate Yamnoon UMAP Chairman, Ministry of Higher Education, Science, Research and Innovation, Thailand

Keynote: International Student Mobility in the Age of the 4th Industrial Revolution

Assoc. Prof. Dr. Bundit Thipakorn Senior Vice President for Academic Affairs, King Mongkut's University of Technology Thonburi, Thailand



Panel Discussion: Intercontinental Student Mobility: What the Future Needs?

Moderator

Asst. Prof. Dr. Issra Pramoolsook Assistant to the Rector for University Council Affairs, Suranaree University of Technology, Thailand

Panelists

- Dr. Randall Martin
Executive Director, British Columbia Council for International Education, Canada
- Dr. Deane Neubauer
Emeritus Professor of Political Science, University of Hawaii, East-West Center, USA
- Prof. Dr. Akiyoshi Yonezawa
Vice-Director, International Strategy Office, Tohoku University, Japan



パネルディスカッションでは長年高等教育機関の国際化等に取り組んできたパネリストが自身の経験を紹介されていました。科学技術の発展による社会の変化に合わせた変革の必要に迫られている高等教育において、国際的な流動性を高める意味を参加者に問いかけしており、会場全体が熱心に聞き入っている様子がうかがえました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2019/11/13/8376/>)

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

在フィリピン日本国大使館を表敬訪問（12月6日）

2019年12月6日（金）、在フィリピン日本国大使館を表敬訪問し、同大使館広報文化班の田口利行専門調査員と面談を行いました。

フィリピン大使館には外国人研究者再招へい事業の審査にご協力いただいています。

今回は日ごろのお礼とご挨拶を兼ね、12月5日に開催された JSPS フィリピン同窓会（JAAP）主催の国際カンファレンス（当日の様子は 20、21 ページに掲載しています。）に出席した翌日に表敬訪問をさせていただいたものです。

面談ではまず山下センター長が JSPS バンコクセンターの活動、JSPS の国際事業および JSPS フィリピン同窓会についてご紹介しました。

田口専門調査員からはフィリピンから日本への留学生の動向や同大使館の広報文化センター（Japan Information and Culture Center : JICC）の活動をご紹介いただいた他、フィリピンで活動している様々な訪日経験者による同窓会についてもご紹介いただきました。フィリピンでは JSPS 同窓会の他にも JICA 事業経験者同窓会や、日本留学経験者による複数の同窓会があるほか、それらの連盟である PHILFEJA（The Philippines-Japan Society）という組織があるということでした。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2019/12/06/8434/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

在ミャンマー日本国大使館を表敬訪問（12月12日）

2019年12月12日（金）在ミャンマー日本国大使館を表敬訪問し、細野淳一参事官と広報文化班の堀口昭仁二等書記官（教育、文化、スポーツ担当）と面談を行いました。

始めに山下センター長から前日11日（木）にヤンゴン大学およびヤンゴン工科大学で実施したJSPS事業説明会（事業説明会の様子は3、4ページに掲載しています。）について報告するとともに、論文博士号取得希望者に対する支援事業等のJSPS国際事業についてご説明しました。また、タイにおける日本の大学の拠点の活動についてもご紹介させていただきました。

細野参事官と堀口書記官からはミャンマー高等教育事情について情報提供いただきました。ミャンマーの教育省（教育や科学技術を所管）や大学には幹部職員も含めて留学経験者が多く、近年はミャンマーと日本の大学間交流が進みミャンマーから日本への留学生数も増加傾向にあるとのことでした。

また、ミャンマーには文部科学省の日本留学海外拠点連携推進事業の委託を受けた岡山大学日本留学情報センター（OJEIC）があり、大使館も連携しているとのことでした。

現時点では研究交流というよりは留学先として日本に関心を持つ方が多いということでしたが、今後ますます両国の学術交流が発展することが見込まれます。

当センターも継続的にミャンマーでの事業説明会を実施していきたいと考えています。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2019/12/12/8448/>）

バンコク研究連絡センターの主催セミナー・参加イベント

第 22 回在タイ大学連絡会 (JUNThai) に出席 (12 月 20 日)

2019 年 12 月 20 日 (金)、在タイ日本国大使館で第 22 回在タイ大学連絡会 (Japanese Universities' Network in Thailand: JUNThai) が開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、臼井国際協力員、濱端国際協力員の 4 名がオブザーバーとして出席しました。

第 1 部の講演会では、以下の 2 つの講演が行われました。

■「東海大学の国際活動の歴史と外地機関のオペレーション」

田中 久美子

東海大学グローバル推進本部海外連絡事務所アセアンオフィス・地域統括



田中さんの講演では、東海大学が他大学に先駆けて、冷戦下にあったロシア(ソ連)と交流を深めたことをご説明されました。

さらに東海大学の海外機関についてもご説明されました。東海大学ヨーロッパ学術センターでは、宿泊施設を備えており、同大学の教員との共同研究に利用することが出来るということです。

最後に田中さんから、東海大学は、今後も幅広い国際事業を進める予定であり、これからも世界に貢献する大学であり続けたいとメッセージを発信されました。

■「東北大学の概要と国際展開について」

濱端 悠祐

日本学術振興会バンコク研究連絡センター国際協力員

濱端国際協力員からは、東北大学の歴史や設立の理念からはじまり、指定国立大学として指定された同大学の成長戦略などを、研究および教育の視点から幅広く紹介しました。

特に、日本人学生の留学促進を目指して導入され、いまや同大学の特色となった SAP (Study Abroad Program) の取り組みや、新青葉山キャンパスに設置が計画されている次世代放射光施設については、JUNThai 参加大学のなかでも際立った取り組みであり、東北大学の今後の発展を考える上で非常に参考になったという声が聞かれました。



第 2 部の連絡会では、JSPS バンコク研究連絡センターより、2 月 18・19 日に、バンコク市内で開催予定の「JSPS バンコク研究連絡センター設立 30 周年記念・NRCT-JSPS-JAAT セミナー」について開催に関する情報を提供させていただきました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2019/12/20/8479/>)

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン・ネパール・インドネシア・マレーシア JSPS 同窓会の活動支援、また、ベトナムでの新規同窓会設立に向けても支援を行っています。

2019 年度第 3 回 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会に出席 (10 月 9 日)

2019 年 10 月 9 日 (水)、今年度第 3 回目の JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会をタイ学術研究会議 (NRCT) で開催しました。

理事会では、主に以下の点について議論を行いました。

1. 前回 (2019 年 7 月 24 日開催) の JAAT 理事会及び総会の議事録の承認
2. 環境問題に関するキャンペーン (@チェンマイ大学) の成果報告
3. JAAT Writing Manuscript for Publication seminar の成果報告
4. JAAT 年次総会の詳細について

特に、JAAT 年次総会に関して、熱のこもった議論を持つことが出来ました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/10/09/8276/>)

第5回 JSPS ネパール同窓会 (NJAA) シンポジウム及び同窓会理事会の開催 (10月14日)

2019年10月14日、ネパールのカトマンズで第5回 JSPS ネパール同窓会 (NJAA) シンポジウムおよび同窓会理事会総会が開催されました。

午前中に開催された理事会では、今年8月14日に開催された JSPS 事業説明会に関する報告がありました。出席者からの評判もよいため、今後も積極的な応募が期待されるということでした。



NJAA 同窓会理事会の様子

引き続き午後からは第5回 JSPS ネパール同窓会シンポジウムが開催されました。

今年のテーマは“Emerging Issues, Challenges and Opportunities in Urban Planning in Nepal”。約100名の研究者や政府関係者、学生の参加をいただきました。

第1部はInaugural sessionです。

日本側からはまず、朝熊由美子 JICA ネパール事務所長が挨拶されました。30年前にネパールを訪れたときよりも、この国は格段に発展を遂げていると感じており、都市問題および交通問題も、そのぶん顕在化しているそうです。そのため、今回のシンポジウムの成果に期待していると仰っていました。

また、西郷正道駐ネパール日本国特命全権大使がご挨拶されました。まず、10月に日本を襲った台風について、ネパール国民からも応援のメッセージを頂いていることに対して感謝の言葉がありました。

そして JSPS ネパール同窓会へ話は移り、同窓会のメンバーは、ネパールや日本で活躍しており、これからも2国間の交流関係を活発化させて欲しいとメッセージを送られました。

ネパール側からは、Dr. Sunil Babu Shrestha (Vice Chancellor of Nepal Academy of Science and Technology (NAST))がご挨拶されました。ネパールが直面している試練を打破するためには、人の繋がりが必要不可欠であり、今回のシンポジウムが、ネパールを変えてくれることを期待しているとメッセージを送っていらっしゃいました。



朝熊 JICA ネパール事務所長



西郷 駐ネパール日本国特命全権大使

第2部は、Scientific session です。

日本側からは、東京大学の加藤浩徳教授が

“Japan on Issues, Challenges and Opportunities in Urban Planning in developing countries” と題して基調講演を行いました。

世界中の都市において、人口の過密化による多くの問題が浮上しています。渋滞の発生などはその典型です。加藤先生は、世界中で起こっている問題をご説明された上で、ネパールで実現できる方策として、ご自身の研究から、以下の3つのアドバイスを提供されました。

- ・心理学 / 教育的側面から考える。
- ・交通需要マネジメント / 大量輸送の方法を再考する。
- ・土地利用と、輸送のあり方を合わせて考える。



東京大学 加藤教授

次に、Mr. Padma S. Joshi と、Mr. Er. Surendra Mohan Shrestha が講演されました。

各講演者の発表の後には、積極的な質疑応答がなされており、シンポジウムは熱気に包まれていました。今回のシンポジウムへのテーマへの、ネパール国民からの関心の高さをうかがい知ることが出来ました。

最後に山下センター長より、JSPS の組織概要、海外研究連絡センターの役割や同窓会、JSPS の各種国際交流事業について説明がありました。

各プログラムの採択率は決して高いものではありませんが、研究者ご自身のために、ぜひ何回でも、JSPS の事業に申請してもらいたいと強調されていました。

JSPS では、今後も各国の同窓会や大学、研究機関と連携し、こうした国際学術交流の機会を支援してまいります。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/10/14/8280/>)

第3回 JSPS インドネシア同窓会 (JAAI) シンポジウム・同窓会総会に出席 (10月31日)

2019年10月31日(木)、JSPS インドネシア同窓会 (JAAI) 主催の第3回国際シンポジウムおよび同窓会総会がインドネシア科学院 (LIPI) との共催により、インドネシア・西ジャワ州ボゴールの Hotel Salak The Heritage で開催され、当センターから山下センター長、富山副センター長、臼井国際協力員が出席しました。また、今回のシンポジウムには在インドネシア日本大使館の高橋佑輔一等書記官と ASEAN 日本政府代表部の宮澤武志一等書記官にもご出席いただきました。

開会式では、シンポジウム Chairman の Dr. Sukma Surya Kusumah、Dr. Mego Pinandito, Deputy Chairman for Scientific Services (LIPI)、Ir. Prakoso, M.M., Secretary of Director General of Strengthening for Research and Development (RISTEK-BRIN) 及び山下センター長が挨拶を行いました。

山下センター長の挨拶の後は引き続き JSPS Bridge Fellowship Award 及び Ronpaku Medal Award が行われ、山下センター長より Dr. Elizabeth Siregar と Dr. Lucky Zamzami に記念品とメダルがそれぞれ授与されました。



山下センター長(左) Dr. Elizabeth Siregar (右)



Dr. Lucky Zamzami (右)

フォトセッションを挟み、シンポジウムのテーマである

「The Role of JAAI to Promote Food, Water, Energy, Human, and Environmental Security」に沿って、日本とインドネシアから4名の研究者をお招きし、ご講演いただきました。

【基調講演】

“Indonesian Politics of Science and Technology in the Post-truth Era”

-京都大学 東南アジア地域研究研究所 岡本正明 教授

岡本先生からはAI等のテクノロジーを活用した政治活動の変化について、2019年のインドネシア大統領選を例にご講演いただきました。



京都大学 岡本正明 教授

【招待講演】

“STI for SDG's in Indonesia: in Case of LIPI Experience”

- Research Center for Biomaterials, Indonesian Institute of Sciences (LIPI), Prof. Bambang Subiyanto

“Recent Development on Nanocellulose Technology”

- 徳島大学大学院社会産業理工学研究部，中垣内アントニオ徳雄 准教授

“Potency Export to Japan: Information and Facilitation for Indonesia SME's”

- The Japan External Trade Organization (JETRO), Dr. Insan Fathir

その後のプレナリーセッションでは12人の研究者からそれぞれシンポジウムテーマに応じた研究について発表が行われました。

プレナリーセッションに続き、同会場でインドネシア同窓会総会が行われました。同窓会設立からこれまでの活動の報告がありました。また、今回のシンポジウムで現会長のDr. Subyaktoが任期を終え、新たにDr. Wahyu Dwiantoが新たな会長に就任することが決まりました。シンポジウム会場では同時にポスター発表も行われており、クロージングセレモニーではベストポスター賞も発表されました。

最後にJAAIのDr. Subyakto会長が閉会の挨拶を述べられ、盛況のうちにシンポジウムが締めくくられました。



徳島大学 中垣内アントニオ徳雄 准教授



Dr. Subyakto (左) Dr. Wahyu Dwianto (右)



集合写真

(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/10/31/8315/>)

2019 年度第 4 回 JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会に出席（11 月 6 日）

2019 年 11 月 6 日（水）、今年度第 4 回目の JSPS タイ同窓会（JAAT）理事会をタイ学術研究会議（NRCT）で開催しました。

理事会では、主に以下の点について議論を行いました。

1. 前回（2019 年 10 月 9 日開催）の JAAT 理事会の議事録の承認
2. JAAT 年次総会および JSPS-NRCT-JAAT セミナー” Sustainable Development Goals (SDGs) in Thailand and Japan ” について

特に JAAT 年次総会および JSPS-NRCT-JAAT セミナーに関して、トピックや講演者について、出席者からアイディアが次々と出され、活発な議論となりました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/11/06/8305/>)

第2回 JSPS フィリピン同窓会 (JAAP) 主催国際カンファレンスに出席 (12月5日)

2019年12月5日(木)と6日(金)の二日間に渡り、JSPS フィリピン同窓会 (JAAP) 主催の第2回国際カンファレンス” Science and Technology at the Forefront of Industry 4.0” がフィリピン・イロイロ市の Courtyard by Marriott Iloilo で開催され、初日の5日には当センターから山下センター長、富山副センター長および臼井国際協力員、JSPS 本部から全孝梨国際協力員が出席しました。

まず JAAP の Dr. Renato G. Reyes 会長が Opening Remarks 開会の挨拶を行い、続いて Dr. Rolly Fuentes (Vice-Chancellor for Research & Extension, UP-Visayas)、Dr. Pagasa D. Gaspillo (JAAP の前身であるフィリピン論博同窓会 (Philippine Society of JSPS RONPAKU Fellows : PRF) の初代会長)、Dr. Leah Buendia (Assistant Secretary, Department of Science and Technology: DOST) が祝辞を述べました。

次に Dr. Dionisio G. Alvindia (Director, Department of Agriculture-Biotech) による基調講演がありました。



Dr. Renato



Dr. Dionisio G. Alvindia

その後、2名の日本人講演者による全体講演が行われました。

近畿大学水産研究所の白樫正准教授からは“PARASITIC DISEASES IN MARINE FINFISH AQUACULTURE; Past, Present and Future”と題し、海水魚の養殖場における魚類寄生虫の防除方法の研究についてご講演いただきました。

東京工業大学学術国際情報センターの西崎真也教授（東京工業大学フィリピン拠点長）からは” Machine Reasoning Symbolic Aspect of Artificial Intelligence”と題し、Machine Reasoning の研究史から近年の研究トレンドについてご講演いただきました。



近畿大学 白樫正准教授



東京工業大学 西崎真也教授

午後にはカンファレンスのテーマに沿ってフィリピンの研究者による講演が行われた他、山下センター長による JSPS の概要紹介および国際事業説明が行われました。

今回のカンファレンスには JAAP のメンバーをはじめ多くの若手研究者を含む約 100 名の参加がありました。また、同会場では若手研究者を中心としたポスター発表も行われており、各講演の合間にも活発に議論する様子が見られました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ : <http://jsps-th.org/2019/12/05/8422/>)

今回の特集では、UMAP 国際事務局事務次長・東洋大学国際学部 芦沢 真五教授に、

「Diversification of Student Mobility and the Role of UMAP (多様化する教育交流と UMAP の役割)」と題し、英語及び日本語でご寄稿いただきました。

※寄稿の記事・論文、図表、写真等の著作権は執筆者に帰属しています。無断複製又は無断転載はおやめください。

(English)

Diversification of Student Mobility and the Role of UMAP

Shingo Ashizawa (Deputy Secretary General, UMAP
International Secretariat)
(Professor, Toyo University)

Introduction

As universities diversify their international strategies, education abroad programs are evolving in many ways. For instance, short programs such as internships and field studies are in great demand and universities are adapting themselves to this change.

Toyo University in Tokyo is currently serving as International Secretariat for UMAP (University of Mobility in Asia and the Pacific). UMAP (pronounced “you-map”) has been promoting the mobility of university students and staff in the region over the past 27 years. In the last two years, UMAP has welcomed a number of new member countries including Canada, US and Australia. Now, UMAP has expanded its network to comprise 22 countries/territories, the largest in its history. In this article, I will introduce the unique activities of UMAP and benefits of UMAP membership.

I. Diversification of Education Abroad Programs

As universities around the world strive for academic excellence and renown, international cooperation is becoming more diversified. Study abroad opportunities for students are also evolving, reflecting changes in higher education. Student exchange used to be designed for a limited number of elite students. However, in recent years the number of shorter programs has increased drastically, while growth in semester or longer study abroad programs has remained steady. Recent statistics show that more US and UK students study abroad in shorter programs (IIE, 2019; Universities UK International, 2019). This tendency exists not only in English-speaking countries, but also in Asian countries including Japan, where there has been a dramatic increase in the number of students participating in “super short-term” programs that last from one week to one month (Ota and Shimmi, 2018). According to the Japan Student Service Organization (JASSO, 2018), the number of Japanese students who participated in such super short-term programs more than tripled between 2009 and 2016, increasing from 16,873 to 60,145. This phenomenon implies that fee-based programs have become the mainstream, compared to traditional tuition waiver exchange models of exchange.

In addition, study abroad is becoming more diversified, with new types of programs being introduced, such as internships, fieldwork and international volunteer programs.

II. Effects of University Networks : Merits of joining UMAP

Developing and maintaining international cooperation is a complex and burdensome duty for individual universities. Therefore, in addition to maintaining bilateral agreements, joining university networks or consortia can be a good way to develop new partners and share resources.

In 1991, UMAP was started with a strong initiative from the Australian government. Since then, UMAP has grown as a voluntary association of government and non-government representatives of the higher education (university) sector in the Asia-Pacific region, with more than 340 member universities in 22 countries/territories. UMAP promotes the mobility of university students and staff and provides the following benefits:

- Universities can participate in a broad range of exchange programs without signing individual bilateral agreements with other universities.
- There is no fee for individual universities, and no application fees for students.
- The UMAP Credit Transfer Scheme (UCTS) simplifies the transfer of credits from students' host universities to their home universities.
- The UMAP Student Connection Online (USCO) makes it easy for students to find and apply to the right program, and streamlines the placement process for participating universities, making it easier to balance inbound and outbound students.
- Both the Taiwanese and Japanese governments offer generous support to UMAP students.
- UMAP encourages joint research activities by offering original research funding, UMAP Research Net.

III. New UMAP Flagship Programs

The main program of UMAP is the one to two semester tuition waiver exchange, UMAP Program A. UMAP also offers UMAP Program C, which includes a wide range of language and cultural programs, internships and fieldwork. In addition, UMAP recently unveiled the following flagship programs:



● **UMAP Discovery Camp:** Every summer, the UMAP National Secretariat in one country hosts the UMAP Discovery Camp, with virtually all local costs covered by the host country. Up to 36 selected students from UMAP member schools study the local culture, social structures, contemporary issues and language for approximately 2 weeks. Philippines hosted the first program in 2016, followed by Japan (2017), Thailand (2018) and Taiwan (2019). Malaysia will host in 2020.

- **UMAP-COIL Honors Program:** In 2019, UMAP introduced the UMAP-COIL (Collaborative Online International Learning) Honors Program hosted by Kansai University in Osaka. Through the COIL model, students from different countries access a joint online study before and after a face-to-face learning opportunity. This honors program was designed for selected students from UMAP member countries and made possible through funding from the Japanese government. Participants were invited on a two-week cruise that departed from Osaka and made half-day stops at various ports in Japan, South Korea, and Russia for field work and university visits. The multidisciplinary academic focus of this honors program incorporated peace studies and conflict resolution. The participants experienced extraordinary workshops and field studies with guest speakers and experts from the Asia Pacific region.



Closing

UMAP is a unique organization which receives support from various governments and universities. While most university networks in Asia accept membership by invitation only, UMAP maintains an open membership policy. As was previously mentioned, major English-speaking countries, Canada, US and Australia have become official UMAP members. With 22 member countries/territories as of January 2020, UMAP is poised to expand its network more broadly than ever before. We hope more universities will join UMAP as we increase educational opportunities in the region. For more information, please visit our website.



<http://umap.org/>

Reference

Ashizawa, S, Hotta, T, Hou, A. Y., de Leon, G. F., & Kobata, K. (2016). UMAP exchange programme and UMAP credit transfer scheme (UCTS) user's guide. UMAP International Secretariat Tokyo, Toyo University, Japan.

IIE, 2019, Open Doors 2019,

Retrieved on Dec. 30, 2019

<https://www.iie.org/en/Research-and-Insights/Open-Doors/Data>

JASSO(Japan Student Service Organization), 2018,

Kyoutei tou ni motodoku Nihonjin Gakusei Ryugaku Jyoukyou Chousa (Statistical Data of Japanese Students Studying Abroad)

Retrieved on Dec. 30, 2019

https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/index.html

Ota and Shimmi, 2018,

“Super-Short-Term” StudyAbroad in Japan: A Dramatic Increase, International Higher Education, #94
Boston College

Universities UK International, 2019. International Facts and Figures

Retrieved on Dec. 30, 2019

<https://www.universitiesuk.ac.uk/International/Documents/2019/International%20facts%20and%20figures%20slides.pdf>

(日本語)

多様化する教育交流と UMAP の役割

UMAP 国際事務局事務次長・東洋大学国際学部教授

芦 沢 真 五

はじめに

大学の国際交流の在り方が多様化する中で、従来から取り組まれてきた学生交換協定を軸とする国際連携のあり方は大きく転換点を迎えている。教育交流プログラムもインターンシップやフィールドワークなどを含め多様なプログラムが展開されており、個々の大学にとってはこうした新しい潮流に適応した国際交流の取り組みを強化していくことが求められている。

筆者が所属する東洋大学は、2016 年 1 月より UMAP (University of Mobility in Asia and the Pacific) の国際事務局を担当している。UMAP は、アジア太平洋地域における留学交流と大学間連携において新たなモデルを提供してきたが、加盟国は 2018 年にカナダに続いて、米国 (2019 年)、オーストラリア (2020 年) が新たに正式に参加したことで、これまで以上に学生交流が活性化する可能性が広がっている。国内外の高等教育機関との連携を強化することで、より効果的な教育交流システムへと発展させていきたい。本稿では、UMAP がアジア太平洋地域における大学間連携において果たすべき役割について論じる。

I. 教育交流と多様化

大学の競争的環境が激化する中で、各国の主要大学関係者はベンチマークやランキングを含めた国際的なポジショニングを否が応でも意識せざるを得なくなっている。また、学生の海外学習機会をみても、少数のエリートのための留学が主流であった時代は過去のものとなった。選抜された学生だけが参加する従来型の交換留学は漸増している一方、参加条件が緩やかな短期プログラムは急激な増加をみせている。米国と英国での短期留学の伸長は目覚ましい (IIE, 2019; Universities UK International, 2019)。日本でも 1 週間から 1 か月の海外研修プログラムの著しい増加をみせている (太田・新見 2018)。JASSO の統計によると、短期プログラム参加者は 2009 年から 2016 年の間に 16,873 人から 60,145 人へと大幅に増加している (JASSO 2018)。

また、今日では目的、学問分野、英語力、GPA、基礎学力の面で多様な人材が留学する。学位を目指す留学、交換留学、短期語学研修など従来からの海外学習に加え、インターンシップ、国際ボランティア、フィールドワークなど多様なモデルが推奨されるようになった。

II. コンソーシアム型の留学交流の可能性：UMAP 活用の提案

個別の大学にとって複雑な国際環境に対応して教育交流を実現していくことは、多大な負担を伴う。個別大学との協定だけでなく、大学間ネットワーク（コンソーシアム）や外部リソースを活用することは不可欠の要素となりつつある。複数の大学がリソースを共有する形で形成されるコンソーシアムが持つ存在意義は教育交流の分野でますます高まると考えられる。

UMAP は、アジア太平洋地域における高等教育機関間の学生・教職員の交流促進を目的として、各国政府、または非政府の代表によって 1991 年に設置された団体である。22 の加盟国/地域、約 340 大学（2020 年 1 月 1 日現在）が参加している。UMAP に加盟することで、参加大学には以下のメリットがもたらされる。

- 大学間で個別交換協定をもたずに学生交流を実施することが可能となる。
- 個別大学の参加費、学生の留学手続きは無料（国/地域単位での負担金は存在する）。
- UMAP 単位互換方式（UCTS: UMAP Credit Transfer Scheme）に基づく単位互換を推奨し、学生や参加大学にとってガイドラインとして活用することができる。
- オンラインシステムで留学プログラム検索、学生の参加申込みとプレイスメントが可能である。また各大学の内部状況に合わせた参加が可能である（春留学・秋留学のみや隔年参加など）。
- 政府支援による UMAP 奨学資金が得られやすい。現行では日本（JASSO による海外留学支援制度奨学金（重点政策枠）UMAP 枠が措置）と、台湾教育部が UMAP 奨学金を提供している。
- 国際教育交流にかかわる研究促進のため、UMAP Research Net による研究資金を受ける機会がある。

III. UMAP が切り開く新たなプログラム

UMAP はこれまで、セメスター以上の交換留学（UMAP では Program A と呼んでいる）を中心にプログラムの運営をおこなってきた。現在は、これに加えて Program C と呼ばれる短期のプログラムも多くの UMAP 加盟大学で実践されてきた。世界的に短期プログラムのニーズが高まり、同時に実施形態もインターンシップなど多様化が進展している。これに対応して、UMAP でも以下のような独自プログラムも開始している。



● UMAP 加盟国/地域が持ち回りで主催する UMAP Discovery Camp は、主催国/地域の全面的な支援を得て、各国の文化や社会を学ぶ短期共同学習プログラムである。約 2 週間にわたって、UMAP 正加盟国/地域から集まった学生と現地学生が共同学習をおこなうものである。2016 年にフィリピンで開始された Discovery Camp は、日本（2017 年）、タイ（2018 年）、台湾（2019 年）、マレーシア（2020 年で予定）と継続開催されている。台湾のプログラムには 36 名が参加し、充実した共同学習をおこなった。

- 日本政府による展開力事業の一環として、2019 年夏より関西大学を中心に UMAP-COIL プログラムを運営している。COIL は Collaborative Online International Learning の略で、オンラインによる教育と対面授業を組み合わせで実施されている。UMAP 加盟国/地域の学生は事前・事後学習をオンラインでおこない、大阪に集結したあと、船上でグループでの共同学習をすすめる、広島、鹿児島、プサン、ウラジオストックなどを回りながら、多様なゲスト・スピーカーのもと、環境、文化人類学、歴史など学際的なアプローチで共同学習をおこなった。



<終わりに>

UMAP は政府機関、産業界、地域との連携もふまえた大学のネットワークとして発展してきたが、冒頭でもふれたように、カナダ、米国、オーストラリアが続けて加入したことにより、アジア太平洋の 22 か国/地域が参加する規模の大きなコンソーシアムへと拡充しつつある。2020 年はさらなる飛躍の年となるよう取り組みを強化し、是非、より多くの大学に参加いただけるように働きかけていきたい。UMAP の詳細については、以下のホームページをご参照していただきたい。



<http://umap.org/>

<参考文献>

Ashizawa, S, Hotta, T, Hou, A. Y., de Leon, G. F., & Kobata, K. (2016). UMAP exchange programme and UMAP credit transfer scheme (UCTS) user' s guide. UMAP International Secretariat Tokyo, Toyo University, Japan.

IIE, 2019, Open Doors 2019,

Retrieved on Dec. 30, 2019

<https://www.iie.org/en/Research-and-Insights/Open-Doors/Data>

JASSO(Japan Student Service Organization), 2018,

Kyoutei tou ni motodoku Nihonjin Gakusei Ryugaku Jyoukyou Chousa (Statistical Data of Japanese Students Studying Abroad)

Retrieved on Dec. 30, 2019

https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/index.html

Ota and Shimmi, 2018,

“Super-Short-Term” StudyAbroad in Japan: A Dramatic Increase, International Higher Education, #94 Boston College

Universities UK International, 2019. International Facts and Figures

Retrieved on Dec. 30, 2019

<https://www.universitiesuk.ac.uk/International/Documents/2019/International%20facts%20and%20figures%20slides.pdf>

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの2019年10月から12月期のその他活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターウェブサイト (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

10月

- 2日 山口大学学生支援部国際交流課 斉藤主任の来訪
- 8日 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト 木村グローバル教育プロデューサーの来訪
- 16日 加藤 理化学研究所理事の来訪

11月

- 上旬 JSPS バンコク研究連絡センター オフィス引っ越し
- 5日 熊本大学 引地准教授らの来訪
東海大学出版部出版課 原職員らの来訪
- 7日 IDE-JETRO 木村 Associate Senior Research Fellow の来訪
AMED ロンドン事務所 高城所長の来訪
- 15日 日本学生支援機構 米川理事、国立大学協会 小形次長らの来訪
- 25日 愛知医科大学 梅村講師の来訪
- 26日 筑波大学 横瀬国際室担当課長らの来訪

12月

- 3日 九州大学 岡本名誉教授らの来訪
- 12日 九州工業大学 松浦文明学務課課長らの来訪
- 16日 岡山大学 仁井国際部国際企画課職員らの来訪

国際協力員2名によるコラム「国際協力員の東南アジア見て歩き」です。初めてのバンコクで生活から、タイをはじめ周辺の東南アジア諸国の旅行記をお届けします。

国際協力員の東南アジア見て歩き

①年末年始クルーズツアーを比べてみよう！（濱端国際協力員）

お正月、皆さんはどのように過ごされたでしょうか？お蕎麦を食べて、お家でゆっくり紅白歌合戦…それもいいと思いますが、なにせここはタイ。蕎麦は無いし、うちのテレビでは、日本の放送を見ることができません。

ということで、今年は家にいても仕方ないな！外に出て、クルーズ船の上でカウントダウンをしてきました！

また数日後に、別の場所で小舟ツアー（?）にも参加しました。今回は、この対象的な2つのツアーについてご紹介したいと思います。

1. チャオプラヤー川周遊クルーズツアー

2019年12月31日の午後から客船に乗り込み、チャオプラヤー川を周遊するコースです。川からの夜景を見ながら、バイキング形式の夕食を食べつつ、1月1日を待ちます。ざっと見積もって5時間半の長旅です。

予想外に嬉しかったのは、ご飯が美味しかったこと（笑）。あたたかくてあまーい、タイの伝統甘味「ブア・ローイ」を食べることもできます。

船はゆっくりと北上していきます。チャオプラヤー川の河口には、観光地が密集していますので、見飽きることはありません。有名なワット・アルンや王宮、そして今やバンコクの顔となった、商業施設アイコンサイアムが、美しくライトアップされています。



心配していたクルーズ時間の長さも、気になりませんでした。船上でバンドの生演奏が始まり、次は歌謡ショーで楽しませてくれます。最後はDJブースが設置され、西洋人もアジア人も踊り狂っていました。そして、いよいよカウントダウンの時間です。もちろん花火も打ち上がります！花火を見るのは久しぶりで、印象的でした。

とても満足なクルーズでした。全くトラブルがなかったのが、逆にタイらしくなかったな、とも思っています。しかし心配せずとも、新年が明けた後の小舟ツアーは、トラブル満載となりましたが。

2. クワンリウム水上マーケット 小舟ツアー

この日は、バンコクの自宅から、公営バスで1時間30分、バンコクはミンブリー区を訪問する予定です。

バス停でバスを30分待ちましたが、最初、バスに見落とされ、バスが走り去って行ってしまいました。でもそんなことはよくあること。しっかり走って、追いつけば良いのです。この日も、次のバス停で無事搭乗できました。公営バスでの移動も、慣れたものです。

訪れた市場は「クワンリウム水上マーケット」。こちらはセンセーブ運河を中心に小規模な市場が広がっています。運河の幅は10メートル程度。両岸には、魚をとるための定置網、養鶏所、タイのお寺、そして民家があり、ここでタイの人々が生活していることがわかります。

この水上マーケットでは、センセーブ運河を周遊するツアーが人気です。1人辺り40バーツ（約150円）。地元の小学生が舟の先に立ち、見どころをガイドしてくれます。

するとガイドの女の子が話し始めたのは 'Thank you very much for coming. My name is ...' えっ、Englishでガイドするの？ここにもグローバル化の波が！とびっくり仰天。途中からタイ語に変更になりましたが、予想外なスタートに楽しい思いをさせてもらいました。



運河の脇でのんびりと日向ぼっこをする人々を横目に、舟はゆっくりと進んでいきます。残念ながら、観光地的な見どころはさほどありません。その分、運河沿いの風景を楽しみました。

運河沿いの家々は、簡素な作りのものが多いです。一般的にですが、このあたりには所得の低い人々が居住し、生活上の不便も多いと聞きます。しかし、路上で過ごす住人の姿は、「平和」という言葉がぴったりなほど、満ち足りて見えるのでした。



一番驚いたのは、オオトカゲの存在です。濁った、運河の水のなかを、全長 1 メートル弱のオオトカゲがゆうゆうと泳いでいます。運河の中で見つかるくらいですから、周辺住民の生活の中にも現れるのでしょう。もしも日本人が、自分の家の敷地内でオオトカゲを見つけてしまったら、ものすごくショックだと思います… タイの人々も、驚きはするでしょうが、自分を落ち着かせる術を知っているのかも知れません。



舟に揺られながら、タイ人は、自分のペースを本当に大事にするよな、ということを考えていました。小説「サバーイ・サバーイ 小説 在チェンマイ日本国総領事館（著：岡崎大五）」でも、その生き方を『何事にもこだわらず、風が胸の中を通り過ぎていくように生きる。それがタイ流かな』と評しています。毎日、心にさざなみを立てず、マイペースに過ごす。日本にいと、そんな人にはなかなか出会うことができなかつた気がします。

もちろん、良い面ばかりではありません。2019 年には、オフィスを来訪するはずの集金業者が、無連絡で 1 時間半遅れてきました。理由を聞くと、「ビルの中で道に迷っちゃって」と言っていました。が、おいおいマイページ過ぎるだろ、と率直に思いました。



そういえば、このマイペースの理由について、「タイ人の自己肯定感は、日本人に比べてかなり高い
ため」と仰っていた人がいて、私は、それが一番納得できました。タイ人と一緒に仕事をしている
と、ちょっとどうかな？と思うシーンもあります。でも、自分は自分のままで良いと思うことで、自
分の歩幅で生活でき、結果、幸福感も高まる気がしました。

改めて 2019 年は、タイに来て、異文化に触れ、世界観を広げた 1 年だったと振り返りました。

なんだか、年越しの豪華クルーズよりも、40 バーツの舟ツアーのほうが実りは多かったような気がし
ないでもないですが、どちらも思い出に残る楽しい旅となりました。

(記事・写真 国際協力員 濱端 悠佑)

国際協力員の東南アジア見て歩き ②東南アジア英語事情（臼井国際協力員）

バンコク生活も残すところあと約 3 か月となりました。私には赴任前から一つ、目標に決めていたことがあったのですが、それは ASEN 加盟 10 か国すべてを訪問すること。国際協力員になる以前にシンガポールとカンボジアには旅行した経験がありましたので、赴任前の時点で未渡航の国はタイを除くとラオス、ミャンマー、ベトナム、インドネシア、フィリピン、マレーシア、ブルネイの 7 か国でした。

6 月のラオス旅行については 2 号前のバンコクの風でご紹介させていただきました。また今号ご紹介した、インドネシア同窓会主催シンポジウム（10 月）、フィリピン同窓会主催国際カンファレンス（12 月）およびヤンゴン大学・ヤンゴン工科大学での JSPS 事業説明会（12 月）でインドネシア、フィリピン、ミャンマーを訪問することができたほか、休日を利用してのプライベート旅行でベトナム、マレーシア、ブルネイを訪れ、現時点で目標を達成することができました。

いずれの国でも驚いたのは旅行中接する現地の方の英語力でした。といっても私が滞在したのはいずれの国でも首都またはそれに準ずる大都市でしたので、限られた経験ではあるのですが、ホテルの滞在やローカルなレストランでの食事、スーパーやコンビニエンスストアでの日常的な買い物をする際、英語が通じずに困ったということはほぼありませんでした。体感としては日本人よりも流ちょうに英語を話す人が多い印象です。

他方、「日本人は英語を話さない」というイメージを持つ人は多いようで、タイ人や旅先で知り合ったヨーロッパの旅行者から「あなたは日本人だけど英語が話せるのですね」と言われたことが何度ありました。英語力の足りなさを自覚している自分にとっては複雑な気持ちになるのですが・・・

調べてみるとシンガポール、フィリピン、マレーシアは第 2 公用語が英語になっており、初等教育の初期段階から英語の授業が始まるようです。旅行先でも字幕なしの英語の番組が普通に放送されており、日常的に英語に触れることができる環境にあるようです。英語教育という点では ASEAN 各国で英語教育が重要視されており、いずれの国でも初等教育段階から英語学習が始まるようですが、この点は日本でも同じと言えます。また、TOEIC リスニング&リーディング試験の 2018 年国別平均得点は日本が 520 点なのに対し、タイが 478 点、インドネシアが 464 点となっています。

TOEIC の点数のみで国全体の英語力を測ることはできないとは思いますが、感覚的な英語力の差があることは興味深いです。よく日本の英語教育は読み書きの学習に偏っているという批判がありますが、その結果がリスニング・リーディングはできるものの、実践の会話が苦手、という日本人の一般的なイメージを証明する結果になっているのかもしれませんが。一方で何度か英語ネイティブスピーカーからリーディングや文法の教育に重点を置く日本の英語教育に対して好意的な意見を聞くこともあり、曰く、スピーキングのみに力を入れても会話の中身が伴わなければ意味がなく、文法を体系的に学ぶことは非常に重要であるとのこと。

近年は日本でも英語教育改革の必要性がよく議論されています。今後はスピーキングにも力を入れていくことから、「日本人は英語を話さ（せ）ない」というイメージは変わっていくかもしれません。

（記事 国際協力員 臼井 真希）

■アジア工科大学、アントレプレナーシップセンターをオープン

アジア工科大学 (Asia Institute of Technology : AIT) は大学院学生に実践的なビジネス経験、イノベーション推進および企業との共同研究を実施する場を提供するため、起業家養成センター (entrepreneurship centre) をランジットキャンパスに開設した。

AIT の Eden Woon 学長は次のように述べた。

「多くの若者はスタートアップ企業の立ち上げや起業に関心を持っている。AIT の学生は社会的に影響力のある分野を学んでおり、社会に対する意識が非常に高い。

彼らのうち起業したいと望んでいる者はだれでもこのセンターによって教育、助言、指導および情報を得ることができる。

AIT のプログラムや学位の多くは持続可能な開発や土木工学といった社会的影響力のある分野に焦点を当てており、多数の学生が関連する企業に就職している。」

9月27日にオープンした起業家養成センターは、学生が別の分野から学んだことを活かし、起業やビジネス環境に適用することを認めている。また、大学の研究成果のおよそ9割は活用されずに忘れられていくが、同センターが大学と民間企業の橋渡しとなり、研究成果をよりビジネスに活かすことを目指している。

このセンターのビジネスパートナーであり、構造および地震工学ソフトウェア会社 Computers and Structures, Inc (CSI) の最高経営責任者である Ashraf Habibullah 氏は以下のように述べた。

「産学の連携は双方向的なものではあるが、企業側に積極的に大学に赴き、まだ活用されていない研究成果を活用することを推奨したい。このようなセンターが大学の研究成果を活用することを可能にし、非常に効果的であると考えている。」

CSI は 20 年近く AIT と協力し、大学の研究を自社のソフトウェア改善に役立ててきた。そして近年 AIT をより起業家的かつ革新的にするために 65 万 USD の助成金を提供している。

AIT は他の大学が利用できる一般的な国の補助金を利用することができない。

Ashraf Habibullah 氏は「長年にわたりよい協力関係を築いている AIT だからこそ例外的にこのような大規模な助成を行った。我々は AIT の能力を信じている。」と語った。

今年設立 60 周年を迎えた AIT も他のすべての教育機関と同じ課題に直面している。すなわち、多数の職業が人工知能に取って代わられる一方で、多くの新たな職業はまだ創出されておらず、デジタル破壊された雇用市場に学生を備えさせなければならないという課題である。

AIT の Naveed Anwar 副学長は以下のように述べた。

「次世代に必要な知識と技能は変化しており、教育システムはこれらの変化に適応しなければならない。

イノベーションの急速な変化により、人々は大学で学んだことが時代遅れになるのではないかと恐れている。そして学び直しやスキルアップをしようとするが、将来に必要な知識・技能はまた変化している。

イノベーションにおいて最も需要の高い分野は農業技術、人工知能、ロボット工学、ドローンおよび IoT である。AIT は食糧生産と廃棄物処理の観点からもっとサーキュラーエコノミーを促進し、よりよい社会をつくるために、これらの技術を統合する方法を模索している。」

Eden Woon 学長は不確かな未来に対する最良のアプローチ方法は、学際的な教育を通して学生を将来に適応させ、独自の課題に取り組むように準備させることであると言う。

「我々是一个の機械の作り方が分かるだけの人材を育てたいのではない。その機械は将来、無くなり、より高度な技術に取って代わられてしまうかもしれない。最も大きな課題は化学や物理学のみによって解決できるものではなく、複数の分野が組み合わさり解決できるものである。」

AIT はすでに地元のスタートアップ企業等との共同事業を開始しており、9月27日にはタイテクノロジースタートアップ企業協会 (Thailand Tech Startup Association) との共催で "100 Innovations x Entrepreneurs" イベントを開催した。このイベントには学生、スタートアップ企業、様々な産業の起業家、開発業者、NGO、投資家およびベンチャーキャピタルが参加し、新しいイノベーションや社会的影響力のある研究と新しいビジネス・アイデアを結び付ける方法等について議論が行われた。

Anwar 副学長は「このイベントは我々がタイテクノロジースタートアップ企業協会と行った最初の重要な共同事業であり、今日ここにいるすべてのパートナーは、私たちがやっていることが良い影響を与えると確信しているだろう。」と語った。

(2019 年 10 月 1 日 Bangkok Post 紙)

■内閣府、246 億バーツの「イノベーション」予算を承認

高等教育科学研究イノベーション政策事務局 (National Higher Education, Science, Research and Innovation Policy Council) によると、内閣府は、タイを本格的な技術基盤社会に移行させるための研究およびイノベーションを支援するために、246 億バーツの予算を承認した。

高等教育科学研究イノベーション政策事務局の Kittipong Promwong 局長は以下のように述べた。

「この予算は最新の会計年度予算からは減っているものの、科学技術に基づく社会を達成するという目標を実現するためのプロジェクト (人材および研究機関の開発、研究の実施、タイの主要な問題を解決するためのイノベーション創出、委託研究、タイの競争性を高め、社会の不均衡を減らすイノベーション) に充てられる。

この目標は、例えばバイオエコノミー、サーキュラーエコノミー、グリーンエコノミーを表すいわゆる「BCG 実践 (BCG in Action)」プログラムなどを通じて、タイを強化することができる。

BCG 実践への投資は、800 万人の雇用創出を通じて推定 4.4 兆バーツの莫大な経済的利益を長期的に生み出す可能性を秘めている。この取り組みが成功すれば農家の一人当たり年間収入を現在の 5 万 8 千バーツから 15 万バーツに増やすことができるだろう。

BCG プロジェクトはまたリサイクルとリユースによって廃棄物を年間 3 百トン削減することができる。この取り組みのいくつかは 2024 年から実を結ぶ可能性がある。

さらにこの予算は、コミュニティ企業やスタートアップ企業などの新しい形態のビジネスを支援するための、いくつかのプロジェクトの立ち上げにも充てられる。

また、特定の分野の最先端の研究や、再教育とスキルアップのプロジェクトおよび大学システム改革の先進的な取り組みもこの予算の恩恵を受けるだろう。

政府は科学研究とイノベーションだけでなく、高等教育機関に資金を投入して質の高い研究者を輩出する方針である。

現在 STEM (Science Technology, Engineering, and Mathematics) 関連の大学卒業生数は卒業生全体の 34% であるが、政府は今後 3 年間でその割合を 40% に、今後 5 年間ではさらに 50% に引き上げることを目指す。

今後 4 年以内にそのような STEM 関連のバックグラウンドを持つ人々に対し、約 10 万 7 千 (うちデジタル業界が 3 万 4 千) の就職先が提供される見込みである。」

(2019 年 10 月 9 日 Bangkok Post 紙)

■マヒドン大学、医学部と工学部のデュアルディグリープログラムを開始

マヒドン大学は医療の革新とメディカルツーリズムの促進を目指し、工学の知識を有する医学部学生を育てるために新たなプログラムを開始した。

マヒドン大学ラマティボディ病院医学部 (Mahidol University Ramathibodi Hospital) の Dr. Piyamitr Sritara 学部長によれば、同大学の工学部とラマティボディ病院医学部は連携して新しい学部学生プログラムを提供する。

この 7 年間のプログラムでは、最初の 3 年間は基礎的な医療コースを受け、4 年目に工学知識の習得と新たなイノベーション創出に専念する。最後の 3 年間は高度な医療コースを受けながら 4 年目に創出したイノベーションを目指す。

Dr. Piyamitr 医学部長は以下のように述べた。

「コースを終了した学生は単なる医師であるだけでなくイノベーターにもなる。彼らは広い視野を持ち、問題を工学的なアプローチから体系的に分析することができるのである。

また彼らは自らの専門性をさらに磨くため、国内のみでなく海外の大学院等にも進学できるだけの専門知識を身に付けるだろう。彼らが7年間に行う研究とイノベーションの創出は大学院の応募資格を満たしうるものになるはずである。」

また、マヒドン大学工学部の Jackrit Suthakorn 学部長は以下のように述べた。「工学知識を持った医師は組織医工学、応用医療学および計算医工学の発展を後押しし、タイの、医療ツーリズムのハブという立場を強化するだろう。」

昨年医療目的でタイを訪問した観光客は、彼らの同行者約 200 万人を除き 105 万人となった。

Dr. Piyamitr 医学部長は「このデュアルディグリープログラムは医療水準を高め、タイの経済全体にも貢献するであろう。」と語った。

このプログラムの定員は年間最大 20 名となる予定である。

募集はタイ大学統一入学制度 (Thai University Central Admission System : TCAS) を通して行われる。

入学希望者は実践的で学術的なプロジェクトへの参加を示すポートフォリオを提出し、このプログラムに適した能力と学術的素質を持っていることを証明することが求められる。

(2019 年 10 月 18 日 Bangkok Post 紙)

■タイ政府、高等教育機関に高度人材養成特別コースの設置を要請

2019 年 10 月 28 日、Somkid Jatusripitak 副首相、Suvit Maesincee 高等教育科学研究イノベーション大臣 (Minister of Higher Education, Science, Research and Innovation : MHESI)、Kittipong Promwong 高等教育科学研究イノベーション政策事務局 (Office of National Higher Education, Science, Research and Innovation Policy Council : ONES) 局長、タイ投資委員会事務局 (Board of Investment : BOI) およびいくつかの大学が集まり、産業界に必要とされる、技術力を持つ労働者を養成するための具体的な政策の開発について協議を行った。

Somkid 副首相は、「大学はこのことに気づき、学生とシラバスが労働市場の需要に対応しているかを評価する必要がある。一方で民間部門と BOI は学術機関の人材育成に協力しなければならない。」と述べ、タイ大学長会議 (Council of University Presidents of Thailand : CUPT) に、大学と調整するよう命じた。

Somkid 副首相はさらに、「タイ政府は労働市場の需要と、5 年人材計画イニシアティブ (five-year Manpower Planning initiative) に従って人材を育成し、国家の発展を推進する計画をどのように支援できるか、十分に理解する必要がある。」と付け加えた。

ONES の Kittipong 局長は、「政府は学生が卒業するのを待っていることはできない。急速に変化するテクノロジーの中で、大学で学んだ技術は企業の要求を満たせなくなる可能性がある。」と述べた。

MHESI では、後でスキルアップあるいは再教育を受けることができる「非卒業生 (non-graduates)」を育成する政策を立ち上げている。この政策は東部経済回廊 (EEC) の域内外双方、エスカーブ産業およびボストンコンサルティンググループモデル産業 (Boston Consulting Group model) に 10 万人の高度人材を輩出することを目的とする。

ONES は今後必要とされる技能のリストを作成中である。その後、学術機関・組織は企業を支援するために必要とされる学術領域のコースを設計することにより、登録トレーニング機関 (Registered Training Org : RTO) として登録することができる。企業は社員にこのコースを受講させることができる。

STEM (Science Technology, Engineering, and Mathematics) 分野の知識を持つ人材を必要とする企業は、何を必要としているか、省庁に通知することができ、STEM 知識を持つ社員のトレーニング予算の 2.5 倍と賃金の 1.5 倍の法人税控除を受けることができる。

Kittipong 局長は、「「未学位取得 (non-degree)」人材の育成は一般の人々がトレーニングに参加し、証明書を受け取ることで、学位取得に必要な単位を蓄積できる ONES サンドボックスモデル (ONES sandbox model) に対応することが期待される。しかしながらこの計画はまだ立案途上にある。」と語った。

(2019 年 10 月 29 日 The Nation 紙)

■タイの大学は生き残るために「変革しなければならない」

個々の目標に合わせ、オンデマンド・24 時間提供可能な柔軟な学習

2019 年 11 月 8 日に開催されたセミナーで、タイの大学はデジタル破壊の時代に生き残るために迅速な変革を遂げなければならない、という議論がなされた。

Patrachart Komolkiti チュラロンコン大学ラーニングイノベーションセンター長 (Learning Innovation Centre at Chulalongkorn University) は、同大学で開催されたセミナー「The Smarter Future of Higher Education」で以下のように述べた。

「大学は将来、全ての年代の学生の学びの場にならなければならない。誰もが自分のキャリアの中で何度も学び直しをする必要があるため、大学で勉強するための年齢制限はなくなる。

タイの出生率は劇的に低下しており、中等教育終了の学生にのみ頼ることはできなくなる。同時に医療技術の向上によりタイの平均寿命は延びることが予想されている。寿命が延びて働く期間も長くなるため、人々は新しい技術の習得のために大学を必要とするようになるだろう。

大学はより柔軟に、自分のペースで学びたい学生に応えるためにカリキュラムを見直さなければならない。

また何よりも、大学自体が学生のための学習スペースになるよう変身しなければならない。大学は、学生の批判的・分析的思考を養う場所、学生が明敏に状況を認識する方法を学ぶ場所でなければならない。」

タイ国立開発局 (National Institute of Development Administration : Nida) 大学院開発経済学研究科 (Graduate School of Development Economics) の Piriya Pholpirul 局長は以下のように述べた。

「デジタルテクノロジーにより、人々はどこでもいつでも学習することが可能になった。大学はこの現代の学習方法に適応しなければならない。

学生は、ライフスタイルに合わせて、また、仕事やその他の活動に関する学習に即して、キャンパス内での学習やオンライン学習またはその組み合わせといった複数の学習方法を、継ぎ目なしに活用できるようになるだろう。

柔軟な学習により、人々は各々の目標に最適な学習を、オンデマンドで 24 時間受けられるようになる。

大学がテクノロジーの発達した将来に適応するべく迅速に変革に着手しないことは、時代遅れになる危険を冒すことになる。

また、未来の大学は学生を国際的、あるいは少なくとも地域的な視点を備えた地球市民になるよう教育しなければならない。

タイの大学は、まもなく国内だけでなく、タイ同様に学生数の減少に悩む海外の教育機関と競合しなければならないだろう。

世界のトップ機関は顧客を求めて新たな市場にサービスを拡大している。タイの大学が世界での地位を向上させることができなければ、学生は彼らに背を向けるだろう。」

(2019 年 11 月 8 日 Bangkok Post 紙)

■パンヤピワット経営大学、来年パタヤキャンパスを開校

タイチョンブリ県：タイの財閥、チャルン・ポカパン・グループ (Charoen Pokphand Group) 傘下の企業大学であるパンヤピワット経営大学 (Panyapiwat Institute of Management : PIM) は来年、パタヤに新キャンパスを開校する。これにより東部経済回廊 (EEC) の高度人材に対する需要の増加に応えることが期待されている。

同大学の組織コミュニケーションおよび市場事務所 (Office of Organisational Communication and Market) の Parichart Buakao 事務所長補佐によれば、「PIM EEC」と名付けられた新キャンパスは、20 億バーツの予算をかけてパタヤの 20 ライ (3 万 2 千平方メートル) の土地に建設中であり、間もなく入学の受付を開始し、2020 年 7 月から授業が開始される予定である。

「PIM EEC」開校の第 1 フェーズにおいては、下記 3 つの学士プログラムが提供される。

1. 自動化工学 (Engineering in Automation) プログラム

デザインおよび自動化システムに焦点を当てたプログラム。これらは現在鉄道や小売業界で実用化されているが、スマートシティやスマート農業計画にも利用できる可能性がある。

2. デジタル技術科学 (Sciences in Digital Technology) プログラム

IoT、ビッグデータ、機械学習に対する知識を強化し、これらの知識を実用化できるようにするプログラム。人工知能およびサイバーセキュリティについても学ぶことができる。

3. イノベーションマネジメント (Innovative Management) プログラム

他のプログラムで開発された技術を、依頼者のニーズに適応できるようにするためのプログラム。

Parichart 氏は、「学生は、ある業界のために開発されたイノベーションを、全国の他の業界に向けてどう拡張利用することができるかを学ぶ。たとえばスマート農業で利用される自動制御技術を、スマートキャンパスシステムに応用することができるのである。」と述べた。

(2019 年 12 月 2 日 Bangkok Post 紙)

■タイ国立科学技術開発庁、香港サイエンス・テクノロジーパークとテクノロジーおよびイノベーション開発で協力

2019 年 11 月 29 日、タイ国立科学技術開発庁 (National Science and Technology Development Agency : NSTDA) と香港サイエンス・テクノロジーパーク (香港科技园 : HKSTP) はテクノロジーおよびイノベーション開発協力に関する覚書を締結した。署名式にはキャリー・ラム香港行政長官と Somkid Jatusripitak タイ副首相も出席した。

NSTDA の Dr. Narong Sirilertworakul 長官と HKSTP の Dr. Sunny Chai 会長によって署名されたこの覚書により、両者は、共同企業支援、ピッチングコンペティション、マッチングおよびデモンストレーションイベントなどのプログラムや活動を通じて、香港とタイの技術企業やスタートアップといった企業間の協力を促進するための枠組みを提供する。

イノベーションハブとしての機能をサポートするため、NSTDA は現在タイランド・サイエンスパーク (Thailand Science Park)、ソフトウェアパーク・タイランド (Software Park Thailand)、フードイノポリス (Food Innopolis) を運営している。

さらに、タイの北部、東北部および南部にある 3 つの地域サイエンスパークの運営支援の他、新しい成長エンジンの促進を目的とした新たなイノベーションハブである東部経済回廊イノベーション (EECi) の設立を主導している。EECi は 2021 年に第 1 フェーズの建設が完了する予定である。

(2019 年 12 月 3 日 タイ国立科学技術開発庁)

■マヒドン大学、ガンとの闘いを後押しする覚書を締結

研究のため、タイ国立がんセンターとがん組織を共有

2019 年 12 月 4 日、マヒドン大学 (Mahidol University) とタイ国立がんセンター (National Cancer Institute of Thailand : NCIT) は、同大学のバイオバンクのがん患者の組織および血液サンプルの収集と利用協力に関する覚書を締結した。

バイオバンクは研究で使用するがん組織と血液サンプルを保存する最新保管施設で、マヒドン大学ラマティボディ病院医学部 (Faculty of Medicine at the university's Ramathibodi Hospital) 内に設置されている。

Piyamitr Sritara 医学部長は記者会見で、両者の協力は、がん治療における精密医療を後押しするとし、以下のように述べた。

「精密医療では、患者の病気を遺伝子および分子レベルで詳細に分析し、個々の必要に応じたテーラーメイド医療を提案する。

可能な限り多くのデータを集めるために 2012 年に設立されたラマティボディ包括腫瘍バイオバンク (Ramathibodi Comprehensive Tumor Biobank) は、がん組織および血液サンプルをマイナス 80 度に保たれた環境で保管できる施設である。

研究者はこれらのサンプルを使用してがん細胞がどのように成長するかを研究し、腫瘍マーカーと治療法を探索することができる。

現在、2000 人のがん患者の組織と血液サンプルがこのバイオバンクに保管されているが、NCIT との協力によりさらに多くのサンプルを収集することができることを期待している。

ほとんどの組織サンプルは、乳がん、大腸がん、肺がんの患者から採取されている。すべてのサンプルは患者の同意を得て保管され、研究目的の要件を満たす必要がある。マヒドン大学は、あまり研究が進んでいない、子どもの視神経がんの研究にも力を入れる予定である。

NCIT の助けを借り、より多くのサンプルを入手することで、がんに関するより多くのデータを収集したい。精密医療はすべてのケースに適用できるわけではないが、さらなる研究開発への非常に良いステップとなる。

さらに、マヒドン大学は Phramongkutklao 病院と Rajavithi 病院との協力も強化する計画である。」

NCIT の Weerawut Imsamran 所長は会見で、精密医療は治療の質および患者の回復の可能性を高めると述べた。

現在、約 10 の国営病院が、がん患者に精密医療を提供しているが、NCIT はこの治療法を早急に、より多く提供したいと考えている。

タイ保健省医療サービス局（Public Health Ministry's Department of Medical Services）によると、タイでは1998年以降に記録された122,757のがん患者のうち、73,000人が死亡している。

がんはタイで一番致死率が高く、また最も治療費がかかる疾患である。保健省によると、がん以外の致死率が高い疾患としては、冠状動脈性心疾患、高血圧および糖尿病などがある。

（2019 年 12 月 5 日 Bangkok Post 紙）

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分

地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/3, 10th floor, Serm-mit Tower, 159

Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand

Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535

Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org

facebook: JSPSBangkok

*2019 年 11 月上旬に同ビル同フロアの反対側へ引っ越しました！

ご来訪の際はご注意ください。



■ 表紙写真紹介



Sultan Omar Ali Saifuddin Mosque

(ブルネイ、バンドルスリブガワン)

今回の表紙はブルネイの首都、バンドルブリスワガンにあるスルタン・オマール・アリ・サイフディーン・モスクです。

ブルネイの王立モスクの一つで 1958 年に第 28 代スルタン、オマール・アリ・サイフディーン 3 世の命により設立されました。

アジア太平洋で最も美しいモスクの 1 つとも言われているそうです。

■ 編集後記

2019 年度第 3 号の「バンコクの風」をお届けいたします。

今回の特集記事は「Diversification of Student Mobility and the Role of UMAP (多様化する教育交流と UMAP の役割)」と題し、東洋大学国際学部教授、UMAP 国際事務局事務次長の芦沢真五先生にご寄稿いただきました。大変お忙しいところご協力いただきましたこと、この場を借りて感謝申し上げます。

2019 年の 10 月から 12 月にかけてはネパール、インドネシア、フィリピン同窓会のイベントが開催された他、オフィスの引っ越しなどもあり、当センターにとっては忙しくも充実した期間となりました。

第 4 期も注目のイベントが待っています。2 月には JSPS バンコク研究連絡センター、タイ学術会議 (NRCT)、JSPS タイ同窓会の共催セミナー・論博メダ授与式がバンコクで、3 月にはマレーシア同窓会の設立総会がクアラルンプールで開催されます。

2019 年度も残すところ 3 か月を切りましたが、最後まで走り抜きたいと思います。

(バンコク研究連絡センター 国際協力員 臼井 真希)

JSPS バンコクニュースレター「バンコクの風」

監修：山下邦明 編集長：富山大
編集担当：臼井真希